

選考をふりかえって

「読書体験記部門」中学生の部 選考長 中西 進

最優秀作、優秀作に選んだ三編は、いずれもすぐれた作品で、それぞれに長所をもつ三編であった。

加藤優月さんの作品は、書物の中の主人公とは経験は別だが、なぜか共感できて涙がこぼれてきたといい、その理由を、同じような悩みを抱えているからだろうと分析する。その結果は、心を自由にすることを読みとつたらしい。そしてもう一つ大事なことは仲間の大切さを教えてもらったという。それらによって、城ともいえる学校を愛することに到達する。すなわち書物の要点をつかむ読書体験が生き生きと描かれていた。

次に城花風さんの作品は、まず「変わるのが怖い」ということばに共鳴し、そのことを軸として「今」を大事にすることの必要性をよみとり「楽しもう精神」を目ざめさせてくれたと納得する。

今も夢があるらしい。その夢への挑戦に頑張ろうと思うに到った読書体験は、すばらしいではないか。

そしてもう一編。松本薫奈さんの「本当の色」も好感がもてた。原作の森絵都さんの「カラフル」は比喩的で、生き方の色具合をいうらしいが、松本さんは「人は自分でも気づかないところで、だれかを救ったり苦しめたりしている」という一文こそ、この本のタイトルではないかと考え、自分も色を決めてしまわないで、自分自身の色も決めず、まさに「色んな人」と話し、仲良くなろうと結論を述べる。

中学生らしいナイーブな読解と志の立て方とに、好感をもった。

毎年思うことだが、中学生時代がもっとも生きにくく、もっとも生き抜くことの大変な時代だということ、今年も感じた。そのためにも大いに本を読み、大いに自分と問答をしてほしいと思う。